月刊ウィーン GEKKAN-WIEN

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

おかげさまで今年は 創刊 24 年目

創刊 1989 年 No.278
2012年8月号

Gustav Klimt（1862-1918） Apfelbaum, um 1912 Öl auf Leinwand 109x110cm Privatbesitz レオポルト美術館 特別展『クリムト個人』8月 27 日まで

杉本純の原子力の話 II
ウィーンと京都 11

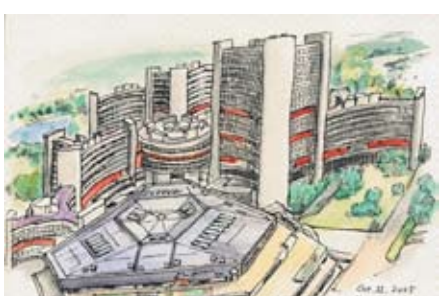
最近の原子力の話題は、福島原子力発電所事故に関する国会事故調査委員会（黒川清委員長）が七月五日に報告書を提出したことであろう。東京電力や規制当局が地震、津波対策を先送りしたことを「事故の根源的原因」とし、「自然災害でなく人災」と断定している。首相官邸の「過剰介入で混乱を招いた」と批判している。報告書は六四一ページ。延べ一一六七人に九百時間以上のヒアリング、三回のタウンミーテングを行い、一万六百余人からアンケート回答を得て、関係先から約二千件の資料提供を得るなど、膨大な調査結果に基づいている。

提言では、規制当局に対する国会の監視、政府の危機管理体制の見直し、被災住民に対する政府の対応、電気事業者の監視、新しい規制組織の要件、原子力法規制の見直し、独立調査委員会の活用の七項目を挙げ、提言の実現に向けて「国民の目から見た新しい安全対策が今、強く求められている」としている。昨年十二月に我が国初めての国会事故調査委が設けられたが、国民の代表としての立場から、東京電力ばかりでなく、前首相を始めとする政府や規制当局に対しても、問題点を厳しく指摘し、踏み込んだ提言をしているのが特徴である。

福島第一原子力発電所
(c) NAIIC

筆者は本報告書の査読者とされているが、参与への情報提供、委員と事務局にシビアアクシデント関連のプレゼンなど、微々たる協力をした。この関連で本年五月に福島発電所を視察する機会に恵まれた。今なお残る津波の爪痕に自然の脅威を感じたが、事故後対応に取り組む多くの技術者の姿にも感銘を受けた。二十㎞圏内の無人の住居を見て、二〇〇六年に訪問したチェルノブイリ発電所三十㎞圏内の廃屋を思わず連想した。チェルノブイリ事故では、放射線による健康影響より避難による住民への社会的、心理学的影響が甚大とウクライナ当局やWHOが教訓として指摘している。福島事故の健康影響は幸いチェルノブイリに比べて極めて小さいと評価されつつあり、被災された方々が一日も早く帰還されることを願わずにはいられなかった。

今月のウィーンと京都の共通点では、両市の料理を紹介したい。勿論料理そのものが似ている訳ではなく、長い歴史と伝統に基づきつつも、新味を取り入れて発展して来た点が共通している。フランス料理を初め世界中の料理が国名で呼ばれるのが普通なのに、ウィーン料理と京料理が都市名で呼ばれるのも珍しく、似ていると言えよう。ウィーンの場合、ハプスブルク帝国の広大な版図から多様な料理文化がウィーンに流れ込み、宮廷や貴族の食卓で独自の料理文化を花開かせたと言われている。宮廷料理ばかりでなく、有名なシニッツェルやグーラシュなど素朴な庶民向け料理も実に美味しい。



一方、京都は、元々は公家を中心とした大饗料理、武士を中心とした本膳料理、寺院を中心とした精進料理、茶道とともに発達した懐石料理が時代とともに発展し、それらが混成して京料理を造りあげたと言われている。現在こそ、新鮮な魚介類も簡単に入手できるが、京都は三方を山に囲まれているため、地元の山野の作物、琵琶湖の淡水産物などを素材に料理人が腕を競った。京料理の繊細で芸術的な料理はこうした土地柄に由来したものと言われている。両市の料理は市民や観光客にとって、最大の楽しみの一つである。

余談であるが、六月初旬ウィーンの国際原子力機関（IAEA）の会合に出席した。会食ではウィーン最古のレストランでウィーン料理を堪能した。その関連でウィーン在住時に事務所から見下ろして描いたIAEAが入るウィーン国際センターのスケッチを掲載させて頂く。

■杉本純 京都大学教授／元原子力機構ウィーン事務所長■